

メニューー めにゆー

「おまちどござさま でした」

お、きたきた

ひかりがゆつくりと、あたしたちのテーブルにやってくる。両手にバナナの乗ったクレープ持って。土曜日のお昼、ほのかと一緒に出かけがてら、様子見にきたんだけど うん。サマになってきてんじゃん。

「あー」

って、見直してるそばから、ちよつとあー!

ひかりがなにかにつまづいて、あたしたちのテーブルにクレープがっつ!?

「おおつとつとっ!」

ころん、と落ちそうになったバナナを、口から迎えにいつてやって

「あむっー!」

よあし、キヤッチ成功

「ご、ごめんなさー」

「ひーっへ、ひーっへ」

むぐむぐ、口動かしながら、あたしはひかりに手え振った。

テーブルに頭乗せたまんまじゃ、あんま説得力ないけど。ま、いっか。

「むぐーん。気にしない、気にしない。おいしいからよし」

となりから、ほのかのハンカチが出てきて、クリームだらけのあたしの口を拭いてくれる。うれしいけど 自分はしっかりクレープ確保しちゃってるんだもんなあ。ちよつかりしてるよ。

ほのかがハンカチしまって 途中でペロツとなめてたような気もするけど、見なかったことにしてテーブルから起き上がる途中、バナナのなくなったクレープ見てたら、

「でもさあ、やっぱちよつとへんな感じだよな」

言葉がちよこつとこぼれちゃった。

変なこと言っちゃったかな、って顔を上げたら、そこにあったのはびっくり顔がふたつ。

ひかりなんか、体がちよつとビクビクしてる。なに？

「え、えつと 私、なにかいけないこと？」

あ？ あゝああ。そういうことね。

あはは。ポケットから、ポルンが頭だけ出して、あたしをじつと見てるよ。だからあゝ、いじめてないつてば。

「違う違う。ひかりがどつどつとててとじゃなくて

これこれ」

手に持ったクレープ指さしたら、ポルンの目が輝いた。ちよつと、隠さないと、ね。

「ポルンはあとで！」

いや、ね。注文しといてなんだけどさ、あかねさんのとこ、っていうと、たこやき、ってイメージがあるから。こんなクレープがあるのが、ちよつ

と違和感っていうか ねえ？」

あはは、われながら、なーに言ってるんだろね。でも、こつやつてひかりと話できるのは、ちよつといひ気持ち、かな。

あ、あれ？ ひかり、うつむいちゃった？

「ひかりさん？ どうかした？」

ほのかが心配そうに顔をのぞき込んでる。こーいうのは、あたしよりわかるんだよね。

でも、よくわからない、って顔してるな。しゃあないか。

「まあまあ、あたしが悪いこと言っただんならあやまるから。ほあらあ！ ひかりが落ち込むと、ポルンが怖いんだもん。ね？」

わざと明るく言ってみたら、ひかりがぱつ、と顔上げて首振った。

「なぎささんが悪いんじゃないんです。ただ、あかねさんも同じこと言ってる。新しくなったんだから、この店らしいメニュー追加したい、って」

新しくなったから、かあ。

あたしがちらつくと目くばせしようとしたら、ほのかはもうこっち見てた。思わず笑いそうになっちゃうよ。1年もつきあつてると、なんとなくわかっちゃうんだよね。

「それならば、ひかりがメニュー作つてみたら？」
びっくりして顔あげたひかり見てたら、くすくす笑いが抑えられなくなっちゃう。あ、痛たた。わき腹つかないでよ、ほのか。

「新しくなったのは、ひかりさんも一緒でしょ？ わたしも、それがいいと思つわ」

ほのかの言葉にうなずきながら、ひかりが車に戻つてつた。やつぱちよつと、かかるかなあ

「なぎさ、なぎさ」

呼ばれて振り返つたら、ほのかが下を指差してた。見たとたんに、ぶつ、ってふき出す音。顔を上げたら口元に手をあてたほのか。あたしも、思わず笑つちやつたよ。

テーブルの上にポルン残してつたの、いつごろ気がつくかな、ひかり？

なぎささんたちが帰つてから、私はメニューのこ
と考えてた。

置いてきぼりにしちゃつたポルンは、さっきから
ポケットに入つたまま。悪いことしちゃつたけど、考
えるのにはちようどいいわ。あとで、なにか作つて
あげましょ。

あ、またお客さま。

「いらつしゃいませ」

男子部の人たちだわ。　そうね、お客さまは女
の子だけじゃないんだし、男の子の意見も聞いてみ
たほうがいいかもしれぬ。

「あの」

席に近寄つて、座つてゐるふたりの男の子たちの顔、

私はお盆を持ったままじつと見つめた。

ええと、なんて言ったらいいのかしら？

「ど、どうかしたの、ひかりちゃん？」

？ なんだらう。男の子たちがおどおどしてるわ。変なの。

でも、ちょっと気持ちが落ちついたわ。普通に聞けばいいのよね。

「なにか、増やしたほうがいいメニューとかって、ありますか？」

すうつ、と私が言ったら、ちょっとだけ、きよんとした。けど、すぐに笑って

「あはは。そうだなあ、ラーメンでもありやね」

ラーメン か。私は目だけ空を見上げて、ちょっと考えた。あの車で、ラーメン

「ちょっと、難しいかも」

大きなナベがないとダメだし、匂いも他のたべものにつつちやいそう。それに、ん

「お、おい。冗談、冗談だってー」

「バカ！ ひかりちゃん素直すぎんだから、へたなこと言うとシャレになんねえぞ！」

考えてたら、目の前のふたりがあたふたしてる。おかしな人たちね。

そつえば、あかねさんが言ってたつけ。へんなこと言われても気にしない、か。それじゃええと、これは冗談、ね なら、ラーメンは消しとかなくちゃ。

「他には、ありますか？」

あら？ ふたりとも黙っちゃった。ええと

「たこやきとジューズ、ふたつづつ！」

うわ！ 突然大声出したと思ったら、向こうむいちゃってるわ。しかたないわね。

「はい。しばらくお待ち下さい」

私はメモ帳に注文を書いて、車の方に戻っていった。

やつぱり、男の子じゃわからないのかもしれないわ。ちょっと、悪いことしちゃったかな？

「ありや？」

公園に止まつてるバンに、準備中の看板がかかつてゐる。

土曜日の昼過ぎ。化学部の実験資料用に予約していた本を買つたついでに、ここに寄つてみたんだけど、お昼ごはんかな？ せっかく来たのになあ。

まあ、ちよつと待つてみよつかな。

バンの近くにあるパラソルの席に腰をかけて、わたしはメガネを拭きながら、ぼーっとしてた。

最近の化学部は、わりといい調子。でも、部長がたまに消えちゃうのが問題なんだよね。

そつなつたのは、ちよつとあの子がほのかのそばに来てから。だから、普段のあの子、ちよつと見てもいいんだ。

あ、看板が営業中になつた。それじゃ、

「注文いらい？」

声を少し張つて呼びかけたら、はい、って声といつしよに、バンの中から女の子が飛び出してきた。大きな目をした女の子。長いみつあみがぴよこぴよこゆれて、子犬みたいだな。

「お待たせしました」

お、お、息切らしちゃつて、ほのかがかわいがつてるの、わかる気がするよ。

「あ、あの？」

でもね、部長なんだから、もちよつとこつちも見てくれないとなあ。

「ええと、たしか、化学部の方——ユリコさん、でしたよね？」

つとと。いっけない。ついつい、見つめちゃうたよ。これじゃ、どこかのヘンタイさんと変わらないな。

「あはは。ごめんね、ジロジロ見ちゃつて。えっ

とね、たこやき二つとウーロン茶、お願いね」

ん？ なんだろ。

きよとん、とした顔してる？

「どなたか、来るんですか？」

来る？ ああ、そっか！

「ちがうちがう、二つともわたしが食べるのよ。こ

このたこやき、おいしいからね」

うわっ！

ちよっと、イスごと引いちゃったじゃない。ああ、

びっくりした。目の前で花が咲いたかと思ったよ。

そのくらい、ものすごく嬉しそうに笑うんだもん。

ほんとに、この店が好きなんだな、この子。

あれ？ 笑顔のおアコにちよっとしわができた

と思つたら、こつち近づいてきたよ。なんだろ？ な

んだかもじもじしてるけど。

「あの、ユリコさん 私、新しいメニューを作り

たいんですけど なにか、ありますか？」

顔上げて、胸にきつた手をあてて、なんか一所

懸命だよ。ふん、メニューねえ

わたしは、メガネをはずして拭くふりしながら、

じつと相手の目を覗き込んでみた。

近眼だから見えないと思つてしょ？ ちよっとボケ

てる分、目の動きとかよくわかっちゃうんだよね。

ほのかの考えることわかんないときも、たまに

やるんだ、これ。頭のいいほのかも、こればかり

は実感できないから。

さて、と。この子の様子だと、けっこつ悩んでる

みたいだけど

「ん、ほのかにも聞いたんでしょ？ なんてつて

た？」

メガネをかけながら、わたしは訊いてみた。

ほのかが近くにいるのに、相談しないわけないも

んね。

「ほのかさんたちは 私が考えなさい、って」

うん。わたしは思わずうなずいちゃうの、がまん

した。

「なら、わたしも答えは同じだよ。あなたが思った

とおりのもの、出してみたら?」

ほのかが、なに思ってたそうだったか、わたしにもわかるよ。ほんと、その場にいたみたいに。

「きつと、なんだっていいはずだよ。あなたが考えたらなら。ね」

難しい顔して手をにぎって、そのまま首かしげた姿、ほんとに子犬みたいだ。

あゝあ、しばらくは、ほのかの代わりに、わたしが化学部引張ってかなきゃだめかもなあ。

ま、それでもいつか。こんな子のためなら、ね

メガネのひと ユリコさんが帰ってから、なんだかいきなり手が空いちちゃった。

ポケットの中のポルンは、さっきあげたクレープに満足して眠ってる。私はポシェットを閉じて、車

の中の流しから、ぼくつと、外を見上げてた。

くもの形、なんだかソフトクリームみたい。あ、今度はホットケーキ。こっちはクレープ でも、みんなメニューにあるわ

「まったく、相変わらずだねえ」

ぼくつと考えてる私の前が、ちよつと暗くなった。あかねさん、車の前に回ってきたんだ。

「ふふん、さっすが」

え? あかねさんが楽しそうに見てる先を目で追ったら 私の手元。コップがみつ、流し台に置きっぱなし。

さすが、って、なんのことだろう??

「くくっ いや、なんでもないよ。」

ごめんねえ。ちよつと用事できちゃってさ。1時間くらいひとりだけど、いい?」

「あ はい」

窓越しに出てきたタオルが、私の鼻をふいてくれる。あらら、泡がついちゃってたんだ。それであか

ねさん、笑ってたのかな。

「それじゃ、ちょっとだけよろしく　あ、そうそう」

流しの中のコップを手に取ったところで、あかねさんが振り返った。

「なんだろう？　って思っても、手はそのまま動いてる。もう、体が慣れちゃったみたい。持ったコップに乾いたタオルを詰めて、逆さにして

「新しいメニュー、考えてくれてるんだってね。あたしが帰ってきたら教えてくれる？　アイディアでいいから」

びたつ、と手が動かなくなった。まるで、いままでやってたこと忘れちゃったみたいに。

「そんじゃ、よろしく〜」

手をひらひらさせながら歩いてくあかねさんが、だんだん小さくなってく。

でも、私の手、まだ動いてくれなかった。

「ちよ、ちよっと。また行くの？」

古着屋で春物の服を見て回った帰り、なぎさについて歩いてたら、いつの間にか見たような場所。

一段高くなってるコーヒーショップ。階段上がって中に入れば、公園がよく見えるはず。大きな公園の奥のほうには、お昼と同じバンがあって

「歩き回って、おなか減っちゃったしね。ほのかも、のどかわいたでしょ？」

なぎさがわたしをちらつ、と見る目。それでわかった。

さっきから、なんだかぼーっと思ってると思ったら

まったく！

「ストップ!!」

「うわあっ！　な、なによ!？」

わたしは大声といっしょに、なぎさの手首を両手でつかまえた。

「なによ、じゃないわよ。もう！」

「な・ぎ・さ!?!」

振り向いたなぎさの顔に、くっついちゃうくらい近づいて、思いつきり目を見つめて。

なに考えてるか、なんて、わかってるんですからね！

「うー、でもさあ?」

後ろはコーヒーショップの壁なんだから、逃がさないわ。そんな上目づかいで見たって、ダメよ。

「それじゃ、ひかりさんのためにならないでしょ？」

これは、ひかりさんの勉強なんだから

な、なに? なぎさがいきなり、きよとん、って目をしてるわ。ちよっと、まさか

「気がつかなかった、とか?」

「べ、勉強なの、あれ!?!」

あ、あはははは まあ、なぎさらしいんだけど、ね。

「あかねさんは立派な大人で、タコカフェの経営者

よ? ひかりさんの意見を参考にするならともかく、頼りきっちゃうわけじゃない。

ただ、タコカフェのことを考えてほしいだけなのよ。きつと」

レンガっぽいコーヒーショップの壁の前、ちよっと下向いちゃったなぎさのとなり、わたしももたれかかった。

ちよっとしてから、なぎさは顔上げて、じつと公園の中を見つめてる。遠くに小さく見えるのは、ひかりさんの働いてる姿。

わたしだって、手伝いたくないわけじゃ

なんて言えばいいのか迷ってたら、いきなり頭の上から声が聞こえてきた。

「あはは。さっすがだねえ。なぎさとは頭のデキが違うよ。」

なぎさとふたりで見上げたら コーヒーカップ持った、あかねさん!?!

「でもね、それだと50点なんだな」

あかねさんが、わたしたちの真上——コーヒーシヨップのテラスから首をだして、こっちを見おろしてるんだわ。

なんで、あかねさんがこんなところに？ それに

50点って??

「ウチならではのメニューってさ、実はもうあるんだよ。とびっきりのがね。」

自分で気づいて欲しいんだけどさ 宿題には重

過ぎるかねえ？」

「重すぎますー！」

え？ また別の声??

「ほのかも！ ちょっとあの子を放っぽりすぎよ」

あかねさんとちよつと離れたところからひよっこり出てきたのは、いつものメガネの顔。

「ユ、ユリコ??」

思わず、なぎさと顔を見合わせて、首を振ったわ。

わたし、知らないわよ、ここにいるなんて！

「中1ですよ？ それもなりたて！ 重い勉強ばっかさせたら、ぺちゃんこになっちゃうわー！」

じろつ、って音が聞こえるようなユリコの視線。久しぶりに見る、本気の目だわ。思わずなぎさの肩抱えちゃうほど怖いもの。

でも、そのなぎさも、ユリコに負けないくらいの目で上を見上げてた。 そうね。わたしもちょっと、厳しすぎるのかも。

「わーかったって。降参、こーさんです」

あかねさんが、しょうがないって顔で両手を上げてるわ。 うん。これなら、きっと大丈夫。

さて、それじゃ。

「 とところで、なんでこんなところでお茶してるのかしら？ ね、ユリコ? 」

ふふふ。さっきまでの怖い顔がウソみたい。真っ赤になって咳払いしてるユリコ見てたら、ついについにっこりしちゃうわ。

「みくんな、おせっかいさん。ね♡」

「ただいまー。ごめんねえ、ひかり。遅くなっちゃってさ」

お客さんが途切れたから、また車の中で洗いものをしていたら、ひよいつ、とあかねさんが入ってきた。

ああ、もう帰ってきちゃったんだ。あれから1時間、結局なにも思いつかないのに

「いやー、歩いた歩いた」

あかねさん、そのまま隣のダンボールに腰かけちゃったわ。ほんとに疲れてるみたい。

私はコップにお水を汲んで、渡してあげた。

私にできることなんて、このくらい。このくらいしかないんだものね

「サンキュ。んーっ、これこれ!! やっぱおいしいわぁ♡」

え？

「ん？ どうかした？」

「おいしいって それ、ただのお水ですよ？ この公園の、水のみ場で汲んできた」

あかねさん、不思議そうな顔で私を見てたけど、いきなり笑い出しちゃった。

「ああ、違う違う。ひかりからもらう水だからおいしいんだよ」

私が渡した、お水??

「手が空くといっつも磨いてんだよねえ、このコップさ」

あかねさん、コップをすっ、と持ち上げた。

ちよっとだけ切り子きりこが入ったガラスに、夕日がキラキラ輝いてる。まるで、オレンジ色のキャンディみたいに。

「きっちり磨いたコップに、やわらかい手に、あつたかい笑顔つき 最っ高のお水じゃない!

これ以上のお水なんか、どこ行ったってありゃしないよ」

お水 私の、お水？

「じゃ、これで決まり」
 コップを置いたあかねさんが、私の頭に手をのせて、くしゃくしゃ、つてした。
 なにが決まりなのか、わけがわからないわ。
 けど、なんだか気持ちよくて、私はそのまま髪をなでられてた。

「あかね先ばい」
 日曜の朝。忠太郎の散歩につきあいながら、ほのかと公園に来たときは、あかね先輩がちょうどメニユーを出してるところ。
 「お。ふたりとも、早いねえ」
 メニユーを車に立てかけて、あかね先輩があたしたちに手を振ってた。
 べこつ、とふたりでおじぎしながら近くまで来たけど、あれ？メニユー、昨日と変わってないな。

「ひかりさんのメニユーは　まだですか？」
 ほのかが忠太郎を座らせながらそう言ったとたん、あかね先輩、まっ白な歯を出してにかつ、て笑った。
 「ああ、これね」
 メニユーをくるつと裏返したら　あはは　あったあつた。たつたひとつだけ書いてある、新しいメニユー
 「ふふくん。常連さんだけが知ってる、タコカフェの裏メニユー、つてとこかな？」
 先輩つてば、ホントうれしそうに言うなあ。思わず、ほのかと顔見合わせて笑っちゃったじゃない。
 「裏メニユー？」
 不思議そうな声が聞こえて顔を上げたら、ひかりが車から降りてくるところだった。おなかのポケット——ポルンをなでながら。
 「あ、ひかり、おはよ」
 つて、あれれ？　なんだか、また難しい顔してる？

「裏メニュー。うら 私たち、見ちゃいけないもの？」

「子犬みたいな目であたしに近づいてきて、ちろつ、と見上げてきてるよ。な、なんだかなあ。」

「って、なに!? いきなり、ぞくぞくっ、って背中が寒くなってる?」

「そーっと振り向いたら、視線が合っちゃったよ。とても怖いので、ふたり分。」

「な〜ぎ〜さあ〜っつ!?!」

「また、ひかりさんに変なこと教え込んだわね!?!」

「うひ〜っ! そりゃ誤解だつて!!」

「ん? ほのかが、目線で合図してる。あ、そっか。」

「誤解だあ〜っつ!!」

「わざと大声出して池のほうに走るあたしを、ほのかたちが追いかけて来た。やれやれ、世話が焼けるんだから。」

「追いかけて回されるふりしながら、あたしたちはち

らつと車の方を見た。裏メニューを見たひかりが、真つ赤な顔でメニューを表に向けてるとこ。

「そうだね。裏でいいんだよ、あのメニューは。」

『ひかりのお水 0円』は、ね

—おしまい—